

源氏物語の鑑賞とその指導

森 一 郎

はじめに

ここに鑑賞というのは、味読といつてもよい。本文に即して鑑賞する本文鑑賞の謂いである。だから解釈といつてさしつかえないのである。たゞ、言葉の置きかえ的に意味をとるのではないということなのである。

私は、鑑賞とは文学的解析だと言う。文学的解析とは、言語・表現の分析を通して、その場面の人間心理などを立体的に浮き彫りしていく解釈作業ということである。

一語一句は作品全体の世界の中に生きている。故に作品全体を観照・鑑賞する心で一語一句をとらえねばならぬ。一語一句を切りはなして考えることはできない。

望むところは源氏物語の鑑賞なのである。

故に、本文に即した解釈のいとなみがやがて作品全体の世界を論じあげつらう鑑賞批評へとつながるのである。

源氏物語は、微妙な点にも語の選択、文の言いまわしなど深い注意をはらっている作品である。だから、その表現効果を味わうとい

うことが、すぐれた多くの文学作品の中でも、とりわけ求められる。

高等学校の読解指導においては、学習目標も基礎的学習に主力がそゝがれ、また生徒の学力など考慮すべき点が多いから、そう高いレベルを期待することはできない。けれども、すぐれた文学作品を読むということはどういふことなのかを知らせるためにも、ただ述べられた事実、内容を読んで満足するのではない読み方があり、作品があるのだということ徹底させる必要がある。

表現効果を味わう読み方こそ文学鑑賞の醍醐味である。そこまできかなければ文学作品を読んだことにはならないし、またそう読ませないようなものはすぐれた作品とは言えないのである。

ところでまた、本文鑑賞のいとなみがやがて到達する作品の鑑賞批評こそ究極の目標であることを忘れてはならない。

表現の微妙な言いまわしをも感受するこまやかな心をもって、作品にひらけゆくさまざまな人生にひそむ人の心を発見し、無限に

心の眼をひらいていくとなみこそ鑑賞教育——文学教育の目標である。

かくて、読解はすなわち鑑賞であり、読解指導はすなわち鑑賞指導といふことができる。

鑑賞教育は、一語一句を文脈、段落、巻、作品全体の中で味読していくいとなみを本筋としつつ、また、読解指導の導入、連絡、完結点等においても行なわれる。具体的に言えば、本文解釈のいとなみと、話のあらすじを語るとか、通釈しおわってのちの鑑賞批評とである。

小考において、私は右に述べてきたごとき見地から、拙い報告ではあるが、第一に、本文解釈（鑑賞）の一例を示し、第二に、鑑賞指導の一端を申しのべさせていたゞきたく思う。このような小考をいわば研究篇と実践篇とに分かつことはまことに恐縮のきわみであるが、なにとぞおゆるしを乞う。

一 総合巻の指示語など

総合巻は、源氏のかつての親友頭中将が源氏の政治的対立者として立ちあらわれる、注目すべき巻であるが、頭中将を源氏の政治的対立者として取り扱う、その取り扱いを、作者は指示語の使い方によって明白に端的に表現している。――

冷泉帝が絵を好ませたまひ、齋宮女御が絵が上手なため、帝の寵愛は次第に弘徽殿女御より齋宮女御のほうに移っていく。弘徽殿女御の父、権中納言はこれを聞いて、躍起となって絵を集め、観覧に供する。そここのころの原文は次のごとくである。

「(前略)例の月次の絵も、見馴れぬさまに、言の葉を書き続け

て御覧せさせたまふ。わざとをかしようしたれば、またごなたにてもこれを御覧するに、心やすくもとり出でたまはず、いといたく秘めて、この御方へ持てわたらせたまふを借しみらうじたまへば、大臣聞きたまひて、なほ権中納言の御心ばへの若若しさこそ、改まり難かめれなど笑ひたまふ」(日本古典全書第二巻、二七三頁)。――

さて、この原文の「またごなたにても」の「ごなた」を花鳥余情、孟津抄は弘徽殿方と解しており、細流抄は「絵に心をとゞめ給故也」と注するのみだが、「弘徽殿方へわたらせたまうのは、絵に心をとゞめ給故也」という意味なのだろうか。吉沢義則博士の対校源氏物語新釈も、岩波の古典系も弘徽殿の所と解している。谷崎源氏もそう解している。すべての注釈書を見わたしたわけではないが、こゝは弘徽殿方と解してきているようである。ところが日本古典全書はこれを齋宮女御の所と解している。一般的に言って一書のみの新説は探るべきものが少ないようではあるが、私は、こゝを私なりに考えて古典全書に注するとおり、齋宮女御の所と解するほうがよいのではないかと考えるのである。

思うに、弘徽殿方と解する考えは、今まで齋宮女御の方へ「繁うわたらせたまひて絵をたのしまれたのに対し、権中納言が絵を観覧に供する今、弘徽殿方へお渡りの帝を「また弘徽殿のところでも」と、対置してとらえたものであろう。しかし、弘徽殿のところでも御覧に入れたことは「見馴れぬさまに言の葉をかきつづけて御覧せさせたまふ」ではつきりしており、それに対し「またごなたにても」であるから、「齋宮女御の所でも」と解するのが自然ではあるまいか。わざとをかしようしたれば」(特別入念に興深くかいてあるのでは、「また

こなたにてもこれを御覧するに」にかゝると考えられる。すなわち特別入念に興深くかいてあることが、帝が「またこなたにてもこれを御覧する」理由なのである。とすると、帝はその絵に興深くかいてあることをすでに知っておられねばならぬことになる。「またこなたにしてもこれを御覧する」行動の因由たるためには「わざとをかしうしたれば」という事実が帝の観察事実となっていないからである。御覧になったことはすでに述べたように「見馴れぬさまに、言の葉を書きつゞけて御覧せさせたまふ」という叙述が保証するところでもある。「わざとをかしうしたれば」は客観的事実たると同時に、帝の主観となっている事実なのである。さればこそ「またこなたにても御覧する」という行動の因由となったのである。ところで「またこなたにても」の「また」は再度、という意味に解される。すると、はじめに御覧になっているのはもちろん弘徽殿の所であるから、弘徽殿の所で御覧になっていて、「また弘徽殿の所でも」と解するのは全く無理である。弘徽殿の所で御覧になって、それが特別入念に興味深くかかれた絵だったので、齋宮女御のところへ持っていってもう一度ゆっくり鑑賞なさろうとされた、と解するのが自然である。このように解してみると、細流抄が「またこなたにても」に注して「絵に心をとゞめ給故也」としたのは「御覧になった絵に心をとゞめ給故」に「もう一度齋宮女御の所でも御覧になろうとする」との意味だったのかも思われないと思われてくる。

齋宮女御の所で御覧になろうとするから権中納言が容易に取り出してお見せしないのであって、弘徽殿の所で御覧になるのに出し惜しみをしてお見せしないというのでは度が過ぎてはいないだろうか。

「わざとをかしうしたれば」が「心やすくもとり出でたまはず、いといたく秘めて」にかゝると見るべきではあるまい。特別入念に作つたればこそ帝にお見せするのであって、特別入念に作つたから出し惜しみしてかくしてしまうというような、まとははずれたことをするとは、いくら権中納言が子供っぽいといっても、考えられないのではなからうか。

権中納言にしてみれば折角の苦心の絵であり、その絵の魅力をいわばおとりにして帝をわがほうへひきつけておきたかったのである。

「この御方（齋宮女御の御方）へもて渡らせたまふを惜しみらうじたま」うと、本文に明記してあるとおりであって、「心やすくもとり出でたまはず、いといたく秘め」たのは、右の文の前文に位置してあるとおり、齋宮女御の所へ持っていってしまったのを惜しむところの前提行為にはかならないのである。齋宮女御の所へ持って行ってしまわれるのを惜しがって出ししぶつたのであって、御覧に入れることじたいを惜しんだのではなかった。

くり返すことになるが、冷泉帝に御覧に入れたことは「御覧せさせたまふ」と、はっきりしている。

それとも源氏物語の書きざまにしばしば見られるように、いったん「御覧せさせたまふ」と大叙しておいて、その御覧に入れ方を細叙して権中納言の出し惜しみぶりを叙べたというのであるうか。しかし、それではあまりに権中納言がカリカチュアライズされすぎてはいないだろうか。単に「御心の若々しき」ではすまされないものがあるうか。帝に対してそんなわるふざけのようなバカげたふるまいをするとはあまりに不自然なように思われる。

それにしても権中納言のふるまいは子供っぽく軽々しいと評され

ねばならないことはたしかである。この場合、帝に差しあげるのがおだやかなふるまいというものである。たゞ、「こなたにても」を弘徽殿の所と解すると権中納言の軽々しさがあまりにひどいことになることを指摘し、齋宮女御の所と解するのが妥当であるとし、権中納言の軽々しさもその程度のもものと評定するに依る。

さて、大分くどくどと述べてきたが、この考えを補強するに足るかと思われるのは、絵合巻における作者の指示語の使い方である。

齋宮女御が入内した当初、冷泉帝はこの方を気がおけるように思われ、前からおいでになる権中納言の御娘、弘徽殿女御のほうを気安くお思ひになつて親しみうちとけられるのであるが、その部分を作者は次のように書いている。

「弘徽殿には御覧じつきたれば、陸まじうあわれに、心やすくおもほし、これは人ざまもいたうしめりはづかしげに、大臣の御もてなしもやむごとなくよそほしければ、あなづりにくくおほされて、御宿直などはひとしくしたまへど、うちとけたる御童遊びに、晝など渡らせたまふことは、あなたがちにおはします」(古典全書第二卷、二六九頁)

「これは人ざまもいたうしめりはづかしげに」と、齋宮女御に対しては「これ」という指示語をもつて呼んでいる。それに対し、「うちとけたる御童遊びに、晝など渡らせたまふことは、あなたがちにおはします」と、弘徽殿女御に対しては「あなたがち」という指示語をもつて呼んでいる。源氏の後見する齋宮女御は、こちら側の人、つまり味方の側の人なのであり、競争関係にある対立者としての弘徽殿女御はあちら側の人、つまり敵側の人なのだとすることが明白に端的

に指示されているといえよう。

齋宮女御を指示する「これは」のところでは、齋宮女御についての叙述のあと、「弘徽殿には……………」の次に「これは」とくるから、単に前文事項を受けた指示語としても見すごされるのであるが、弘徽殿女御を「あなた」(あちら)と呼んだところで、対照がけざやかに浮きばりされる。この物語を読みあげる女房の声が「うちとけたる御童遊びに、晝など渡らせたまふことは、あなたがちにおはします」と聞えてくる時、弘徽殿女御をあちら側の人、敵側の人とするこの物語の立場をはっきりと聞き手、すなわち物語の享受者は知らされるであろう。

「こちら」とか「あちら」とかいう表現は端的な言い方、単純明快にすぎる言い方であるが、特にこの言葉が耳からはいつてくる時は印象があざやかである。説ませて、耳で聞いてたのしんだのだという物語音読論(玉上琢弥先生)の立場が注意されるべきで、耳からはいつてくる表現効果を味わうべきところである。

さて、このように源氏の側をこちらとし、権中納言のほうをあちら側とする指示語の用い方は絵合巻で一貫している。

「齋宮の女御、いとをかしうかかせたまひければ、ごれに御心移りて……………」(古典全書第二卷、二七二頁)の「これ」は単なる前文事項を受ける指示語とも解せるわけだが、齋宮女御を指すことには相違ない。やはり作者の意図をひっかけていると見てもさしつかえない。さきに考えた「この御方へもて渡らせたまふを惜しむらうじたまへば」の「この御方」は明白に齋宮女御を指しているし、古典全書第二卷、二七九頁の「あなたにも心して……………」の「あなた」は明白に弘徽殿女御のほうである。

かような指示語の使いわけの用例は、この巻(絵合巻)では以上

のごとくわずかな用例ではあるが、すべて例外はない。

故に、「またこなたにても」の「こなた」も、この縁でいくと、
びたり齋宮女御の所だと言えるわけである。

私は、総合巻の、指示語の使い方は、作者の明確な意図によつて
なされていると考えるので、これにもそのまま適用してさしつかえ
ないのではないかと思うのである。

以上、「こなた」という一語をめぐって考えをのべたが、このよ
うな、指示語の使い方に見られる、敵と味方、あちら側とこちら側
という考え方は、源氏物語の物語的限界といつてさしつかえないも
のである。源氏を主人公とするこの物語では作者も説者も源氏の味
方なのであった。その意味で、総合の行事において、齋宮女御方を
左とし、弘徽殿女御方を右としていることも注意しておいてよいこ
とである。先に入内された弘徽殿女御のほうを上席である左に、後
から入内された齋宮女御を右にすることも考えられないことではな
かろう。しかしそうしなかったのは、後見する源氏(内大臣)と権中
納言の身分の差もさることながら、源氏を優位におき、源氏に味方
するこの物語の立場、約束のようなもの、によるのである。前東宮
を父とされた齋宮女御の身分はこゝではさほど重くは考えられない。
帝の御子ならば考えるべきであるが、すでに亡くなられた前東
宮の御子という程度では弘徽殿女御にまさるとは言えないであろ
う。弘徽殿女御は摂政太政大臣の孫娘。齋宮女御は孤児の身のうえ
なのである。光源氏の後援なくしては頼りない身のうえである。やは
り源氏の後見ということが齋宮女御を「左」の上席においた理由に
ちがいない。「御もてなしもやむごとなくよそほしければ」(古典
全書第二巻、二六九頁)とあるように、源氏の重々しい後見であつた

のである。

総合における左右の席の配置にも優位性を源氏の側に与えている
ことは、身分という客観的な事柄に正しく支えられていることではあ
るが、この物語のあり方——源氏に優位性を与え、好意ある描き方
をする——を示したものと考えられるのである。

注 総合において、左の位置、左の座席は上位として優位に考え
る慣習、不文律的なものがあつた。総合も準じて考えてよい
であらう。

二の二 敬語学習——鑑賞指導その一——

一語一句の本文に即し、分析的に味読していく授業の一例とし
て、かつて「源氏物語の敬語学習」というテーマで研究授業を担当
したときの記録の要約を述べていた。

文法テキストによつて敬語の学習をしておく。尊敬語、謙讓語、丁
寧語の機能を、文例をあげて説明する。四段活用「たまふ」など
の尊敬語、「聞ゆ」「奉る」などの謙讓語(尊敬語の「奉る」もつ
いでに説明しておく)、主格謙讓語である二段活用の「たま
ふ」、丁寧語の「はべり」など主要な敬語はおぼえさせておく。こ
の文法テキストによる敬語学習をすませたのち、研究授業にのぞん
だ。教材は「雨夜の品定め」の段である。私は生徒に本文を読ませ
てのち、敬語を抽出させ、尊敬語、謙讓語、丁寧語の使われ方をし
らべさせた。

生徒はノートにメモをとり、次のような調査結果を発表した。
まず、地の文で、源氏と宮腹の中将(頭中将)の対話
場面では宮腹の中將に尊敬語「たまふ」がつけられて
いない。(たゞし「……きこえたまふ」の用例は見られ

る。源氏には「たまふ」「宣たまふ」など、ほとんど、完全といつていゝほどもなく尊敬語がつけられている。次に、地の文で、中将から源氏への動作には「きこゆ」がついており、源氏から中将への動作にはついていない。次に会話文では中将は源氏に対することばにおいて、丁寧語「はべり」、主格謙讓の「たまふ」を使っているが、源氏は中将に対することばの中で用いていない。また、中将はその会話のことばにおいて源氏の動作に尊敬語を多く用いているが、源氏はたゞ一例しか尊敬語を用いていない。——以上のことを文例をあげて發表した。——

この結果にもとづき、なぜこのような敬語の相違が見られるのかを考へさせた。そして、宮腹の中将は敬語のつくべき人であるが、身分の高い源氏の中将と対座しているため敬語が簡略にされ、あるいは省略されているのであること。帝の御子たる源氏の中将と左大臣の子息たる宮腹の中将と、その間の身分差ではっきり使いわけられていることに思ひいたらしめたのであった。

さて次に、左馬頭と藤式部丞が登場して以後の、中将に対する敬語のつき方を調べさせた。すると中将に敬語のつく所とつかない所がそれぞれ見える。

君のうちねぶりに言葉まぜたまはぬを、さうくしく心やましと思ふ。馬の頭ものさだめの博士になりて、ひざらきあたり。中将はこのことわり聞きはてむと、心に入れてあへしらひあたまへり。

源氏と対していることが意識される所には中将に敬語がついていない。左馬頭と対していることが意識される所には敬語がついてるのである。

中将いみじく信じて、つらづゑをつきてむかひたまへり。

「さるにより、かたき世ぞとは、定めかねたるぞや」と言ひはやしたまふ。

これらの例は中将が左馬頭と対していることが意識される所であつて、敬語がついている。

このように、同一人物でも場合によって敬語の使い方が違う。すなわち身分の高い人と対する時、低い人と対する時とで使い分けられるのであることを理解させることができたのであった。——以上、「要約」を述べさしていただき、授業の一端の報告とする。

次に、花の宴巻の一節の敬語の使い方につき、考へを述べたい。観桜の御宴が催された場面、東宮（のちの朱雀院）が源氏に舞を所望される所。

「楽どもなどはさらにもいはず調へさせたまへり。やうやう入日になる程、春の鶯さへづるといふ舞、いとおもしろく見ゆるに、源氏の御紅葉の賀の折、おぼし出でられて、春宮、かざし賜はせて、切に責めたまはするに、のがれ難くて、立ちて、のどかに、袖かへす所を、ひとをれ気色ばかり舞ひたまへるに、似るべきものなく見ゆ。……………」

「春宮、かざし賜はせて」の「賜はせ」は「賜はす」の連用形。「賜ひ」より一段上の敬語で最高敬語。「責めたまはする」の「のたまはする」も「のたまふ」よりも一段上の敬語で最高敬語。重々しい最高敬語がほど近くに続けて使われていることに注意すべきである。かざしの御下賜と、そして舞の御所望は、辞退を許さぬ威威がこもっているのである。東宮はのちの朱雀院で、温和な方であるはずだが、こゝでは東宮という身分の重み、勢威で、宰相の中将たる源氏に

いなやを言わせない感じがある。それをこの最高敬語の使い方であらわしていると思う。最高敬語の重みによってそのような感じがなまなましくつたわってくるのである。作者が意識していたかどうかは別として、この表現効果を私は信ずる。

さて、それに対し、源氏の動作は「のがれ難くて、立ちて、のどかに、袖かへす所を、ひとをれ気色ばかり舞ひたまへるに、」とあって、敬語は動作の叙述の最後のみについている。これは、東宮という尊い身分と、臣下で宰相中将たる源氏との身分差によると考えてよいと思われるが、切迫した雰囲気をもし出すための技巧として敬語を簡略にした趣きもあると思う。「のがれ難くて、立ちて」と、東宮の勢威に押されて止むなく立つ動作の切迫感、心理的衝撃を表現していると解されるのである。

同じ花の宴巻の、次の一節のごときはどう考えるべきだらうか。「……かやうに思ひかけぬ程に、もし然りぬべきひまもやある、と藤壺わたりを、わりなう怒びてうかがひありけど、語らふべき戸口も鎖してければ、うち歎きて、なほあらじに、弘徽殿の細殿に立ち寄りたまへれば、三の口あきたり」。

「立ち寄りたまへれば」に敬語があるのみで、「うかがひありけど」、「うち歎きて」など敬語がない。主語は源氏であるから、これらにも敬語があるべきであるが、ない。これは、読者が、作中人物である源氏に自己を没入し、源氏と一つになって、源氏になりきって「うかがひありき」「うち歎く」気持になる、そういう効果を持つ叙述技巧である。私が以上のように感じ、考え、理解するのは、玉上塚歌先生の「敬語の文学的考察」（『国語国文』昭和二十七年三月号）に教えられてである。

敬語学習もまた、文法的分析に出発しつつ、文学的解析へと高み深めていかなければならない。

二の二 お話——鑑賞指導その二——

読解指導において生徒が学習に興味を持つように種々工夫が要請されるが、導入の時点や、つなぎ・連絡の時点で、その教材に関する解説や話のあらすじを語ることを、私はしている。また、読解の完結として鑑賞批評を原則として行なうようにしている。この学習の中で、思想的な鑑賞教育——文学教育を目指す。すなわち、さまざまな人生にひそむ人の心を発見し、無限に心の眼をひらいていくとなみを通して、寛く深く豊かな心の芽ぐみを育てたいのである。

これは最近の授業のことなのだ。

紫上の死を描く場面の学習にはいるに際し、紫上を死へ導いた事件である女三の宮降嫁の事件を話してやった。

学問的でありつゝも、生徒にわかりやすいようにやさしく話さねばならなかった。たとえば、生徒は「東宮」というより「皇太子」というほうがわかりやすいのである。第一、「女三の宮」というのは、第三番目の内親王という意味だということから話さねばならなかったのである。「内親王」というより「皇女」という方がわかりやすいのだという配慮も必要なのであった。

一寸、そのお話の一部を再現してみよう。

女三の宮降嫁の事件

女三の宮は朱雀上皇最愛の内親王・皇女であります。御父朱雀上皇はこの頃ずっと御病氣でした。かねてより、出家の志がお深かったのでありましたが、いよくそれを実行しようとお思いになりま

す。ところで御出家あそばすにつけてこの三番目の姫宮のことが大そう気がかりなのです。

姫宮は、お年はまだ十三才、大変頼りない性質の方でありました。その上、母上は既に早く亡くなられていました。上皇が御出家あそばしたら姫宮は誰を頼りにお暮らしになるうとするのか。上皇はただこのことを御心配でした。そこで姫宮の生涯を託すべき人、婿君をきめようと、上皇はお考えになるのです。

上皇最愛の皇女にふさわしい方ということになるとなか／＼それに適する人物は見あたりません。身分が高くなければならず、同時に、万事にゆきとどいた頼もしい人物で、こまやかな愛情がほしいのです。

源氏の長男夕霧中納言をとお考えになりましたが、彼は長年の恋が実を結んだばかりでしたし、一夫多妻の当時にはまれなかた人でしたから、その最愛の妻雲井の唯一人を大切に守ってわき目もふらぬという有様でした。その上に女三の宮をとわれにいきそうになく、候補からはずさざるをえませんでした。主だった乳母たちを集めて上皇は御思案なさるのですが、乳母たちが源氏をすすめます。「源氏は夕霧中納言とちがって、今もなお女に心がひかれるくせはおやみにならず、特に、身分ある正夫人を望んでいられるとのことです」と乳母たちは申しあげます。「さあ、その変わらぬ浮気心がとても不安なのだ」とおっしゃりつゝも、上皇は心の中でこの姫宮を源氏におあづけしようとお思いになる様子です。「娘を嫁がせるなら、あんな人のところへとの親でも思うであらう」とおっしゃるのです。上皇は光源氏の人となりに変はれこんでいらつしやるのでした。光源氏は、ゆったりと落ちついて、万事を心得たこまやかな心くばり、きめのこまかな愛情の持主なのです。そして絶

世の美貌、輝くばかりの人なのです。魅惑の男性と言うべきか、女君たちのあこがれの人なのです。身分の高さも申しようがありません。準太上天皇といって上皇に準ずる身分なのです。

太政大臣の子息柏木衛門督、源氏の弟君警兵部郷宮、院の別当藤大納言など希望者も多かったのですが、身分も人柄も愛情もということになるとそのすべてをかね備えた理想の人とはいずれも言いがたいのです。やはり源氏をおいてほかにありません。ただ、源氏にけ多くの婦人たちがいますので、女三の宮がいやな思いをすることがあるうと案じなさいましたが、万事を心得た源氏の人柄にすべてを託すお気持ちになりました。上皇の御子である皇太子も「源氏に親代わりのようにおあづけなさいませ」と進言なさいました。

このようにして、いよく上皇は姫宮を源氏にあずけることを御決意あそばしましたのです。

源氏は、上皇の御意向をそのお使いの者、左中弁から伝え聞いて当惑します。源氏は上皇より三才年下なのです。この時源氏は三十九才でした。「上皇とさして変わらぬ年令だもの、どれだけ姫宮の御世話ができようか」と思うのでした。

けれども結局源氏は上皇の申し出を承諾するのです。それは、女三の宮はあの藤壺の宮の姫にあたっていたからなのです。永遠の恋人藤壺の宮にゆかりの人、紫のゆかりに対して源氏はいつも／＼あこがれ求めているのです。「女三の宮の母君は藤壺中宮の妹君で、御器量も藤壺中宮について美しいといわれた方だから、この姫宮も並々の御容貌ではいらつしやるまい」と、源氏は好奇心をのぞかせています。

△紙幅制約のため、中略▽

この女三の宮降嫁によって大きな打撃を受けるのは紫上です。紫上は正夫人葵上が亡くなったあとの、事実上の正夫人として、六条院の女主人なのでした。ところがこゝに朱雀上皇最愛の皇女という申し分なき身分をもって、女三の宮が、久しく空席であった光源氏の正夫人におさまることになるわけですから、紫上はもはや六条院の女主人ではいられなくなり、

紫上のみじめさは言いようがありません。今まで光源氏最愛の思人として、あがめられ、かしくされた晴れの身の上であったのに、にわかには引きずりおろされるみじめさ、あさましさ。耐えがたいはずかしめ。私たちはそのいたまじさに目をそむけたくなりません。

まさに人生は無常です。昨日まで春のように幸福であった人が今日は冬のきびしく寒い北風に吹きさらされているのです。

信じてきた光源氏の心、きづきあげてきた二人の愛が、無情にもくずれていくのです。紫上は深い孤独に呆然となるのでした。

△後略▽

こんなぐあいに約十五分ぐらいた話す。源氏物語への導入として、やさしく興味深くと念じながら話すのである。

人生の明暗にひそむ人の心を思いやり、人の生の喜びと悲しみに心の眼をひらく「さまざまな人間・人生への開眼」という文学生活を深める一助たらんと念じつゝ話すのである。

文学鑑賞とは転身・感情移入である。作中人物にわが身をひき入れて作中人物と運命を共にする共感的理解こそ文学鑑賞である。それはすなわち他人のこともよそごとならず思え、その心を思いやる、寛い、大きな、深い心の芽ぐみを育てるいとなみである。

源氏物語は多様な人の生をうつし、読む者に深い感動を与え、かような心の芽ぐみを育てる文学教育のすぐれた教材である。

私たちはこのすぐれた作品を文学教育のために真に生かしきるべく、いろ／＼と努力していかなばならないと思う。

鑑賞教育の実例として拙い報告をかえりみずその一端を述べさせていたゞいたわけであるが、最初に述べたように、本文に即しての鑑賞、一語一句ごとく味読していくいとなみを本筋とすべきだということ強調しておきたい。一語一句ごとに、その表現効果や、単なる注釈でない意味、言葉の歴史的意味を鑑賞しつつ語ってやる方法を、私は説解指導の態度としている。その具体例を「鑑賞指導その一」で示すべきであったが、今回は敬語学習にページを割いた。いずれ機会をあらためて述べたいと思う。

(大阪府立春日丘高等学校教諭)